

〔甲陽軍鑑九下品第二十六〕一板垣信形笛吹峠のこなた、かる井澤に、十一月まで罷有、同野陣に假屋形をひろく作り、十月六日の始の合戦に、手にあはざる衆、手柄の武士共にも上中をさたして饗應を仕るに、上の手柄には膳三膳、或は二膳、赤椀にて振舞、又手にあはざる人々には、黒椀にて精進飯をくれらる、是を他國にて信玄公なされたるとさたあり、板垣信形短氣なる人にて如此、

〔半日閑話一〕一十二月十三日御煤拂御規式略○中

御目見御吸物御酒被下退出仕候、押付右之御下男頭御使に而御年男江被下物略○中

赤椀三ツ組 三具略○中

右之通宿所江被遣、此品を元日御年男夫婦、家司壹人上下三人にて祝之と云、

〔嬉遊笑覽二下器用〕黒漆の椀は賤きものにて、田舎にのみ用ひたりしを、宗易家○千好事に、茶席に用ひたりしより、會席椀と稱するものを、ことさらに作ることはなれり、

〔明良洪範六〕又同家忠池田ノ三浦舍人ノ嫡子帶刀へ、忠勝井○酒ノ末女ヲ送ラント申サレシガ、同

心セズ略○中 忠勝感心シ、萬事其方ノ心次第ニ取扱フベシト申サル、故事調ヒケル、三浦ハ祿モ

家人モ多ク、不自由ナケレド、婚姻有シ後ハ、萬事質素ニテ、調度ナドモ、花美ナル物ハ用ズ、膳部モ平膳黒椀ニテ、瓮菜也、

〔正月揃四〕轆轤師青陽

轆轤師塗師の正月、五日より鉞鉞の具足を調、入山去秋に木を臥、木地を挽ば、塗師これを請取て、鮫椀の葉、木賊にて摺磨、黒わん、皆朱略○下

〔元祿曾我物語三〕帚掃除世話やかでよし茶屋座敷

太鼓座頭を御伽に出し、うるみ椀にいつかけした家具に向へば、五夕膳の胸算用も、違ひはあらし、